

平成 30 年 2 月の解説（府県天気予報）

【2月の天候状況】

上旬は、1～2日に低気圧が日本の南を東北東へ進み、西日本の山沿いを中心にまとまった雪が降ったほか、関東甲信地方では広い範囲で積雪となりました。その後は冬型の気圧配置が強まり、東日本以西を中心に強い寒気に覆われました。東・西日本日本海側では大雪となり、九州や四国の平地でも積雪となる所がありました。福井では7日の最深積雪が140cmを超えるなど、発達した雪雲が日本海から集中的に流れ込んだ北陸地方は記録的な大雪となりました。この影響で除雪作業中等の死者が複数出たほか、交通網が大混乱したり、農業用ハウスが倒壊するなどの農業施設被害が発生しました。沖縄・奄美と西日本では、旬平均気温が1996年以来22年ぶりになり低くなりました。

中旬のはじめは、冬型の気圧配置が強く、全国的に顕著な低温となりました。日本海側は発達した雪雲が日本海から断続的に流れ込んで広い範囲で大雪となり、13日の日最深積雪は山形県肘折（ひじおり）で1982年11月の統計開始以降1位の445cm、福井県九頭竜（くずりゅう）で1982年10月の統計開始以降1位の301cmを記録しました。また、九州や四国でも山地を中心に大雪となり、福岡や高知で積雪を観測するなど、平地でも積雪となる所がありました。14日は日本海を東へ進む低気圧に向かって西・東日本の広い範囲に南から暖かい空気が流れ込み、九州北部・中国・北陸地方で春一番を観測しました。その後は、北日本と東日本日本海側は気圧の谷や寒気の影響を受けることが多く、17～18日は急速に発達した低気圧の影響で暴風雪や大雪となった所がありました。一方、東日本太平洋側と西日本および沖縄・奄美は気圧の谷の影響が弱く、晴れた日が多くなりました。

下旬は、北～西日本は低気圧と高気圧が交互に通過したため天気は数日の周期で変化し、日本海側はこの時期としては晴れた日が多くなりました。東日本太平洋側は低気圧の影響を受けることがほとんどなく、降水量がかなり少なくなりました。北日本は強い寒気に覆われて気温の低い日が多く、23～25日は発達しながら通過した低気圧の影響で暴風雪や大雪となった所がありました。北海道幌加内（ほろかない）では、25日の日最深積雪が1981年10月の統計開始以降1位の324cmに達し、北海道内で観測史上最深を記録しました。28日は低気圧が発達しながら東シナ海から日本海へ進み、西日本では暴風や大雨となった所があったほか、四国・東海地方では春一番を観測しました。沖縄・奄美は、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。

月平均気温は、全国的に低くなりました。月降水量は、東日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側と沖縄・奄美で少なく、北日本と東日本日本海側、西日本太平洋側では平年並でした。月間日照時間は、北日本太平洋側と東・西日本で多く、北日本日本海側と沖縄・奄美では平年並でした。降雪の深さ月合計は西日本日本海側でかなり多く、東日本日本海側と西日本太平洋側で多かった一方、北日本日本海側で少なく、北・東日本太平洋側で平年並でした。月最深積雪は、東・西日本日本海側で多いところが多くなりました。

【2月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報は83%、明後日予報は80%で、どちらも例年並でした。地方別の適中率では、明日予報は関東甲信地方、四国地方、九州北部地方、九州南部地方で例年値^(注)を下回り、特に九州北部地方では8ポイント低くなりました。一方、明後日予報では、北日本、東海地方、九州南部地方以外で例年値以下となり、特に四国地方では9ポイント低くなりました。

明日の最高気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.4小さい1.2で、すべての地方で例年値を下回りました。最低気温の予報誤差は、全国平均で例年値より0.2小さい1.3で、

北陸地方を除く各地方で例年値以下となりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【4月の天気予報の利用にあたって】

4月は移動性高気圧に覆われた穏やかな日が多くなりますが、低気圧が発達しながら日本付近を通過して、雨や風が強まって荒れた天気になることもあります。また、多雪地域では低気圧の通過に伴って融雪が一層進みますので注意が必要です。災害をもたらすような荒天が予想される場合は、気象情報や警報・注意報を発表しますので、最新の情報を参照して下さい。